

博士論文執筆経験談：「博士課程で得られたもの」

平成18年3月修了生 **清野 辰彦**

(東京学芸大学附属世田谷小学校)

1. はじめに

平成19年度合同ゼミナールでは、「先輩に聞く博士論文執筆経験談」を語る1人としてお声をかけてくださり、誠にありがとうございました。

このお話を専任教員であります相川先生からお伺いしたとき、光栄に思うと同時に、「何を皆さんにお話すればよいのか」「皆さんにお話しできる話題があるのか」と感じたため、一度は、お断りしようと思いましたが、大変お世話になりました東京学芸大学のために、そして博士課程の後輩であります皆さんのために、少しでもお役に立ちたいという思いが強く沸いてきたため、引き受けさせていただきました。

ここでは、当時お話をさせていただいた内容を振り返り、いくつかの内容について記述させていただきたいと思います。

2. 師との出会い

人の道は、人との関わりの中で作られていく。私がそのように心底実感したのが、大学4年生の時でした。私は大学3年時に行われるゼミ希望調査において、指導教官が未決定であり、「新任教官」としてしか記載されていないゼミを希望しました。何か、ワクワクし、未来に希望を感じたのです。それから、数ヶ月後。桜が散り始めた頃、第1回目のゼミが催され、新任教官と初顔合わせ。ゼミの先生は、数学教育学を専門とする藤井齊亮先生という先生でした。きりっとした顔つきでお話しなさる内容に、算数・数学の深さや教科教育学の面白さを強く感じました。毎回のゼミが楽しみで、その世界にだんだんと浸っていきました。そして、ついには、「研究したい」「どうせ研究するなら・・・」という思いが沸き、博士課程への道を志したのです。また、この時に抱いた純粋で強い気持ちは、博士論文を執筆するにあたっての原動力となりました。

3. 問題意識は何か、研究テーマは何か

卒業論文、修士論文、博士論文を執筆するにあたって、常に考えていたことがあります。それは、「なぜ数学を勉強するのか」、そして、「なぜ数学を教えるのか」という数学の教授・学習の意義についてです。こうした根源的な問いの追及は、直接研究を先に押し進めるものとはなりません、自分の教育観に深みをも

たせてくれたと思っています。

研究上、次のことも常に考えながら生活をしていました。それは、「問題意識を明確にする」、「自分の研究を特徴づけるキーワードを明確にする」ということです。博士論文では、自分で設定した問題を自分で解決することになるため、まず、どのような問題を解決しようとしているのかを明確にすることが必要となるからです。また、自分の研究の特徴づけを行うということは、研究のオリジナリティを明確にすることになるため、この点についても常に考えていました。

4. 博士課程では何を学んだのか

私は、博士課程において、研究について、そして人の生き方などについて多くのことを学びました。そのいくつかを列挙すれば、以下のように記述できます。

—教科教育学として、研究のための研究になってはならない

—先行研究に学ぶ：温故知新の精神

—自分の教育観と対峙し、じっくりと見つめ直すことの重要性

これまで記述してきたように、博士課程では、博士論文を執筆し、博士号を得るというだけでなく、ものごとの考え方や人として生きていくうえでの大切なことなどを学んだり、また、人との絆を得たりすることができました。これらも私の宝となっています。

5. おわりに

皆さんの博士論文は、必ずや、その専門分野の新境地を切り拓き、また、子どもたちのより良い教育へと貢献するはずです。皆さんの確固とした信念と熱い情熱で、ぜひとも博士論文を完成してください。切に願っております。